



県内首長インタビュー⑤0

小川町 松本 恒夫 町長 (69歳)



「小川町合併60周年記念式典」の松本町長。
小川町の自然や伝統を生かしたまちづくりを推進中。

■和紙のふるさと

小川町といえば和紙のまちとして有名です。「小川和紙」の中でも楮（こうぞ）だけを使い、手すきの温もりを感じる「細川紙」の手漉き和紙技術は、昭和53年に国の重要無形文化財に指定され、平成26年にはユネスコ無形文化遺産に登録されたことで、小川和紙の知名度が一気に全国規模になったことは記憶に新しいところです。

小川和紙の歴史は古く、その始まりは1300年前まで遡ります。江戸時代の商人の大福帳などの帳面用紙としてはもちろん、見た目の美しさや強靱性などから、庶民の暮らしの中にも溶け込み、町は和紙の一大産地として繁栄しました。和紙の需要は明治以降も続きましたが、戦後になるとその需要は減少しました。しかし、近年の和紙ブームでその美しさや温かさが見直されて、週末には紙すき体験などで和紙工房を訪れる人々で、まちは活気を取り戻しています。



町内には今も20軒余りの紙問屋があり、和紙の文化が継承されています。「道の駅おがわまち」を併設する「埼玉伝統工芸会館」では、和紙づくりをはじめ、和紙をテーマにしたさまざまな体験ができます。また、施設内の埼玉伝統工芸会館では、小川和紙以外にも、岩槻の人形や春日部の桐箆笥、飯能の大島紬、鴻巣のひな人形など、埼玉県指定の伝統的手工芸品20産地30品目が全て展示されているのも大きな特徴で、県の伝統を確認できる施設としても人気を集めています。

小川町では名産の和紙にちなんだイベントも数多く開催されています。なかでも和紙をふんだんに使用した豪華絢爛な飾りで有名な「小川町七夕まつり」は、戦後直後から回を重ねて平成28年7月に68回を迎え、県を代表する夏まつりのひとつとなっています。また、毎年12月に行われる「小川和紙マラソン」は、今年で24回を重ね、国内で開催されるランニング大会の参加ランナーの投票で選ばれる「全国ランニング大会100撰」で毎年ランキングするほどの人気を誇ります。豊かな小川の自然の中を走るこの大会は、毎年5000人近いランナーが全国から集まるまちの一大イベントとなっています。

■武蔵の小京都のたたずまい

小川町は、江戸から川越を抜け、秩父に向かう往還があったため「六斎市」で賑わうなど、この地域の商業の中心であったと言われていています。前述の和紙をはじめ、酒蔵や建具、絹織物、鬼瓦などの伝統産業で栄えた小川町は「武蔵の小京都」とも呼ばれ、町のいたる所に歴史を偲ばせる史跡や蔵が点在しています。

埼玉県は清酒出荷量が全国4位で、県内には35もの酒蔵がありますが、小川町にも由緒

埼玉伝統工芸会館の和紙工房では、職人による手すき和紙の工程見学や、体験もできます。また、地元産の小麦を自家製粉したうどん、そばも味わえ、地元有機野菜や惣菜の販売所もあり、小川町を五感で堪能できます。

ある3つの酒蔵があります。秩父山系を源とする良質の水や盆地独特の気候と酒造りに適した自然環境に囲まれ、関東灘の異名をとった銘醸地の小川町は、地酒の産地としても有名です。県の協力により始まり、今年で3回目を迎えた町内の3つの酒蔵を無料シャトルバスで巡る「ちょこたび埼玉酒蔵めぐりin小川町」も県内外から愛酒家が訪れ、回を重ねる度に参加者が増えてきました。

また、幕末の志士、山岡鉄舟がこの地に滞在した割烹旅館で誕生したとされる「忠七めし」は、ご飯に海苔や薬味を加えて、秘伝のつゆをかけて啜るお茶漬けのような汁飯ですが、東京の「深川めし」、大阪の「かやくめし」などと並び、宮内庁が行った全国郷土料理調査において、日本の代表的料理に選出され、「日本五大名飯」のひとつに挙げられています。



歴史を切り取ったように残る「吉田家住宅」。外観はもちろん、居住空間もそのままの形で残っています。ドラマの撮影にも使用されるなど、小川町の名所のひとつとなっています。

趣のある老舗割烹の個室でいただく忠七めしは、少し贅沢な時間も味わうことができます。

歴史を感じさせる名所としては、JR八高線竹沢駅から

徒歩約15分の距離にある吉田家住宅も外せないスポットです。300年前の享保6年に建築された吉田家住宅は、実年代のわかる県内最古の民家として国の重要文化財建造物に指定されています。一般にも開放されていて、蕎麦や団子などの軽食を楽しめるほか、各種教室や結婚式場など、さまざまなイベント会場としても利用されています。

小川町の概要

人口(H28年1月1日 一住民基本台帳一)	31,563人
世帯数(同上)	12,942世帯
平均年齢(H28年埼玉県町(丁)字別人口調査)	50.8歳
生産年齢人口比率(同上)	59.1%
面積(H27年全国都道府県市町村別面積調)	60.36km ²
名目市内総生産(H25年度市町村経済計算)	695億6,000万円
製造品出荷額等(H26年工業統計)	859億7,932万円
事業所数(H26年経済センサス)	1,318事業所



小川町を代表する伝統文化の数々。現在も職人の手で传承されています。



■魅力あるまちづくりを発信中

小川町は、前述のように多くの伝統文化が継承されています。また、外秩父の山々に囲まれて、まちの中央には槻川が流れるなど、自然に恵まれた緑豊かなまちで、まちの6割近くを森林資源が占めています。このような豊かな文化と自然に囲まれた一方で、近年は、関越道の嵐山小川ICの使用開始や国道254号バイパスからアクセス道路、自動車のエンジン工場の稼働など、都市的变化も相次いでいます。その一方で、近年は他自治体同様に人口減や少子高齢化の課題も抱えています。

小川町では多くの問題を抱えながら「自然の恵みと文化を未来につなぐ、人が輝くまちおがわ」を将来像とする「小川町第5次総合振興計画」が本年の4月からスタートしました。この総合振興計画を基本に、県内でもトップクラスの歴史と文化の蓄積度や地域資源を最大限有効活用しながら、「小川町まち・ひと・しごと創生総合戦略」において基本目標とした「人口誘導・定住促進」「しごとづくり」「結婚・出産・子育て」「魅力・活力、安全・安心」の4つを柱にまちづくりを展開しています。

また、それと同時に、庁舎のエコオフィス化や、廃食油・生ごみの資源化、防犯灯のLED化などの「低炭素地域づくり」事業に取り組んでおり、その効果の「見える化」による環境啓発を積極的に推進し、魅力あるまちづくりを発信しています。